

將軍綱吉からの礼状

〈解説文〉

為歳暮祝儀

小袖一重到来、

歡思召候、委曲

阿部豊後守可

述候也

十二月廿九日 印

内藤侍従とのへ

〈読み下し文〉

歳暮祝儀として小袖一重到来、せいぼ こそでひとえ 歡よろこばしく思おもひ召めし候、委曲阿部豊いきよく ぶん 後守述ごのぶべく候也

十二月二十九日 印（黒印）

内藤侍従殿へ

〈用語の解説〉

- ・小袖…上質な表着。うわぎ
- ・思し召す…「思う」「考える」の尊敬語。お思いになる。
- ・委曲…委細。詳細。
- ・阿部豊後守…老中の阿部豊後守正武。

〈解説〉

歳暮として將軍家に小袖を献上したことに對する礼状である。送り主は黒印の人物、五代將軍徳川綱吉である。

江戸幕府では、年始と八朔はっさく（8月1日、徳川家康江戸入城の日）に次いで、人日じんじつ（正月7日）・上巳じょうし（3月3日）・端午たんご（5月5日）・七夕（7月7日）・重陽ちやうよう（9月9日）の五節句が重視され、毎年殿中儀礼が行われた。これは贈答をともなうもので、端午・重陽の節句及び歳暮には、諸大名が祝儀として將軍に衣服を献上するのが恒例となっていた。その返礼として、將軍から発給された御内書である。御内書の書面は幕府の右筆ゆうひつによって記され、上下二つ折りにする折紙の形態をとる。

内藤侍従は、高遠領知以前の内藤家当主重頼しげよりをさす。若年寄・大坂城代・京都所司代を務め、摂津国・河内国など3万3000

石を領有した。重頼が従四位下侍従に叙任されたのは、貞享4（1687）年10月21日のことである。

『世乗三』元禄2年4月の条に「旧冬歳暮御祝儀として時服献じられ候につき、御内書御頂戴ちやうだいなさる」として、同一の文面を引用している。御内書の発給事務は、月番老中の阿部豊後守正武が担当した。

内藤家資料には、他にも同様の御内書が十数通残されている。宛名に「伊賀守」「大和守」と記したものもあるが、いずれも重頼をさす。重頼が伊賀守となった貞享元年から元禄3年に没するまでの間に発給されたものとみられる。

重頼の養嗣子となった清長きよなが（清枚）が高遠領を幕府から与えられたのは、元禄4年のことであつた。

【参考文献】

- ・新井敦史『武士と大名の古文書入門』天野出版工房
- ・日本歴史学会編『概説古文書学 近世編』吉川弘文館